



# 長倉三郎先生を偲んで

Kiyokazu FUKE 富宅喜代一 長光会, 豊田理化学研究所

長倉三郎先生は日本の化学の発展に非常に大きな貢献をされ、令和2年4月16日にお亡くなりになった。先生が主宰されておられた東京大学物性研究所研究室の後半の頃の弟子に当たる筆者は先生の偉大なご業績のごく一部しか垣間見ておらず、俯瞰的なご紹介は長倉研の諸先輩方にお任せするしかない。中でも長倉先生が赤松秀雄先生、井口洋夫先生とともに創設された分子科学研究所は、日本の分子科学分野のメッカとして、この半世紀近くにわたって非常に多くの研究者を育成し輩出する役割を担ってきた。このご貢献1つを顧みても、筆舌に尽くしがたいものである。筆者も1988年初冬からの7年間と定年後の7年間、この研究所に大変お世話になってきたが、この間も多くの研究者が羽ばたかれ、科学界でご活躍されている。秋深くなると紅葉が際立ってくる研究所の中庭には、長倉先生の石碑が赤松、井口両先生のものとともに写真のようにたたずんでいる。



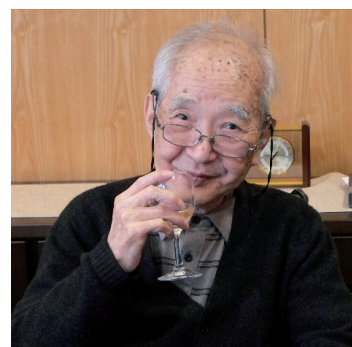
分子科学研究所 長倉三郎先生の石碑

碑に刻まれている「新しい科学の芽 ここに育まれ 大樹とならん」という先生の先見に満ち満ちたお言葉を何度も復唱しながら研究に勤しんだことが懐かしく思い起こされる。

長倉先生は非常に多くの弟子を育てられたが、謹厳で筆者を含め不肖の弟子たちにはかなり怖い先生と研究室では言い伝えられており、集まったときは叱られた回数を自慢する雰囲気もあった。筆者が先生のご著書「有機電子論」を読み耽り量子化学に憧れて長倉研の門をたたいたのは1970年春で、先生は前記の研究所の創設準備で奔走されている最中であった。この年の研究室の新生徒は筆者1人で、入学直後は先生直々にご指導を受けることになったが、ご議論いただくために先生の居室へ向かう物性研の廊下の限りなく長かったことを思い出す。2ヵ月ほどして東北大に栄転される茅幸二先輩が進められていた真空紫外分光法を用いた水素結合の共有結合性の研究を引き継ぐため、理研

通学となった。しばらくして装置の要となる回折格子を不注意で損傷し破門の覚悟までしたが、先生は苦言の一言もなく済まされた。器用な茅先輩が設計された癖のある装置に悩まされて途方に暮れていたとき、近くで眺め手を差し伸べていただいた岩田末廣先輩もまもなく米国留学されたため、博士課程からは先生の直接指導となった。水素結合の研究は先生のライフワークの1つで、その結合の本質を探る先見的で重要な課題であった。当時はまだ直接的に探る実験方法が整っていなかったため、明解な実験結果は示せなかった。しかし今振り返ってみると、最近でも化学の命題として国内外で研究が続いており、筆者も最新の実験技術を携えて再挑戦したいと願ったりもする。卒業後はアメリカに2年間、帰国して金沢大学、慶應義塾大学、分子研と異動したが、先生にはその間も折に触れて目に留めていただいた。その後、震災直後の神戸大学に赴任した折には、西部開拓の幌馬車の銀製レリーフを送っていただいた。神戸で開拓精神を発揮するようにと励ましを込めて下さったようで、そのレリーフを今も私の居室の壁に飾っている。

先生がお亡くなりになるちょうど2年前の4月15日に先輩方とともに、先生がお住まいになられていた老人ホームにお見舞いに伺った。悪い先輩に誘われて持ち込み禁止のワインを先生とともに楽し



提供：吉田隆氏

んだひとときの先生のなんとも味わい深い表情のお写真を添えている。長倉先生は半世紀以上、個性豊かな非常に多くのお弟子さんに分け隔てのない扇の要となつてこられた。この1枚のお写真の中にも、筆者には到底及びもつかない先生の非常に懐の深い教育者としての心根が偲ばれる。長倉研に受け入れていただき自然科学研究の世界に誘っていただいたことは、私にとって生涯の財産となっており感謝してもしきれない。